

中学校長会会長賞

堺市立 旭中学校 三年

高橋 佑太

人を責め立てない社会へ

犯罪や非行に走った人を、自分も含めて、ほとんどの人は強く責め立てようと思います。僕は、それを「犯罪や非行のない社会」を築けなくする行為だと考えました。また、それと同時に、現在の社会は、犯罪や非行に走った人が更生しづらい社会だと考えました。

僕が、なぜそのように考えたのかというと、犯罪や非行に走った人の背景をテレビやインターネットで知るたびに、「こんなにも苦しくて悲惨な環境で育った、過ごした人がいるのだな」と感じ、自分もそのような環境で育ったりしたら、犯罪や非行に走ってしまうかもしれないと考えたからです。悲惨な環境とは、親に放置されたり虐待されるような環境や、親に厳しく管理、監視されるような環境のことを指します。しかし、そのような環境で育った、過ごしたからといって、犯罪や非行は決して許されることではありません。被害者と、被害者の家族のことを考えるとなおさらです。だからといって、無関係の僕たちが犯罪や非行に走った人を責め立てることはできないと思います。特に、苦しく悲惨な環境

で過ごしたために犯罪や非行に走った人を責め立てることは、先ほどの自分の考えと、もう一つの考えから、してはいけないことだと考えました。「もう一つの考え」とは、どんな理由であれ、大人数が相手に苦痛を与えることは「いじめ」だという考えです。まず、僕たちは「いじめ」を決してしてはいけないことだと思っています。「いじめ」とは、相手に大人数が苦痛を与えることだと考えられています。これと、犯罪や非行に走っても更生しようとしている人を僕たちが責め立てることは、「大人数が苦痛を与える」という点から、同じことだと僕は考えました。このようにして、僕は「もう一つの考え」に行き着きました。

「いじめ」をされると、自分で自分の命を絶ってしまったり、逆に、反発して、「いじめ」を行った人に暴力をふるってしまったりすることが少なからずあります。そのように、犯罪や非行に走った人も、社会全体から責め立てられることで、更生、社会復帰を邪魔され、場合によっては再び犯罪や非行に走ってしまうことがあります。実際、日本の再犯率は五割近く、ノルウェーは二割程

度というように、日本の社会は世界的にも、犯罪や非行に走った人の更生、社会復帰が難しいということが分かります。さらに、再犯に走る理由として、仕事に就けないことや、住む家がないこと、社会が受け入れてくれないことがあり、やはり、社会全体が犯罪や非行に走った人を責め立てたり、排除したりしていることが、犯罪や非行に走った人の更生、社会復帰を妨害、再犯を引き起こしているのではないのでしょうか。

「犯罪や非行のない明るい社会」をつくるために、僕は、まず、犯罪や非行に関係なく、他の人がしたことの背景を汲みとったり、知ることが大切だと思いました。そのようにしていくことで、他人を偏見の目で見たり、責め立てたり、「いじめ」をしたりすることを減らし、ゆくゆくは、犯罪や非行に走った人の更生や社会復帰を促し、犯罪や非行を減らせるのではないかと考えました。このようなことをできるようにするためには、まず、僕たち一人一人に、「社会」をつくっているという意識が必要だと思いました。他人事では社会全体の風潮は変えていけないと思ったからです。また、他者の背景を汲みとれていない人や偏見を持っている人の背景を理解していくことも必要ではないかと思いました。「明るい社会」を作るためには、お互いの理解が不可欠だと思ったからです。

これまでのことをまとめていくと、「犯罪や非行のない明るい社

会」をつくるには、社会にいる全ての人が他の人のことを理解すること、他の人を強く責め立てたり、偏見の目で見たりしないこと、他の人に寛容になって、みんなで助け合うことといった三つのことを行う必要があると思います。これらは理想論で、完全に実現できるものではないですが、「僕たちが社会をつくっていく」という意識を持って、少しでも実践していけば、犯罪や非行に走った人が更生、社会復帰しやすくなり、僕たちも幸せになれる社会になるのではないかと思います。僕自身も、先の三つのことを少しでもできるようにして行って、「犯罪や非行のない明るい社会」をつくることの手伝いを少しでもしていきたいと思っています。

